「天明狂歌」名義考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1360

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「天明狂歌」名義考

石川　了

一　はじめに

現在我々が当たり前のように使用している「天明狂歌」の語は、一体誰がいつ頃から言い始めたのかと中野三敏氏から質問されたのは、平成十二年六月に東京大学本郷キャンパスで日本近世文学会春季大会が開催され、小林ふみ子氏の「落栗庵元木網の天明狂歌」と題する研究発表が終わった後の休憩時間だったと思う。脳裏では即座に、幕末の天明老人内匠か近代の野崎左文あたりだろうと予測はしたものの、思ってもみない命題だっただけに即答できず、今後留意しておきますとお答えするのが精一杯だった。あれから四年半が過ぎ、その間にいくつかの好資料にも恵まれた。私見をまとめてその「名義考」と題する所以である。ちなみに前もってお断りすれば、結論としては稚拙な臆測とはまったく異なるところに辿り着いた。

二　江戸期(1)　―文化期まで―

天明狂歌を一言でいえば、天明年間を最盛期とする、上方狂歌に対する江戸狂歌の一体と呼んでよろしかろう。つまりは時期と歌風の問題ということになる。だとすれば、原則的には天明期より前にその用例があるはずもなく、恐らくは下って天明期を回顧する時期になってからの、またはそれに代わる新しい歌風が生まれてからの用語と思われ、管見の限りでは、文化期以前に「天明狂歌」またはそれに類する用例を見いだし得ない。またすでに指摘があるように、天明期に活躍した狂歌作者の大半はこの文化期までに死没しており、著名な存命作者としては四方赤良、鹿都部真顔、宿屋飯盛を含めてわずか五、六名にすぎない。(注1) そこで天明期の作者たちが、主として時期をどこまで遡って回顧しているかについて、次に例示して確認しておきたい（【　】内は傍線部からの逆算によるその上限）。

ア、朱楽菅江撰『八重垣結縁』（天明8・10序・刊）「この五とせ六とせがほど、（中略）人〳〵俳諧体の和歌を詠ず」（自序）→【天明二、三年】

イ、元木網撰『新古今狂歌集』（寛政6・6序・刊）「（狂歌に自分が）たはぶれしは、過にし天明のはじめの年葉月の頃になんありける。それより人〳〵、月〳〵に柴の戸ぼそをたゝき、日〳〵に草の庵にうちつどひけり」（自序）→【天明初年】

ウ、鹿都部真顔撰『四方の巴流』（寛政7・1刊）「鳥がなくあづまぶりは、わづかにはたとせばかりこのかた、わがともがらよりもてはやして」（四方山人「狂歌堂に判者をゆづること葉」）→【安永三年】

エ、尋幽亭桃吉撰『二妙集』（寛政7・4序・刊）「はたとせあまりの往昔（中略）、其頃はいまだ戯歌の友がき、五月闇の星よりもまれ〳〵なりしが、いまや武蔵野の草葉のごと生しげりて」（橘洲序）→【安永三年】

オ、尚左堂俊満撰『狂歌左鞆絵』（享和2・6序・刊）「安永のころ牛込の大人、たはれ歌の名に用られしこそ、此道中興開山には有けれ」（自序）→【安永の頃】

カ、金鶏編『狂歌五百題集』（文化8・秋刊）「行風、貞柳の古方家をとらず、おほく天明このかたの後世家をあつめたり」（芍薬亭長根序）→【天明初年】

キ、宿屋飯盛撰『狂歌画像作者部類』（文化8・秋刊）では、本文上段への収録者を「古人之部」「現在作者之部」「安永天明頃之部」の順に分けて記載する。→【安永・天明期】

ク、六樹園飯盛撰『万代狂歌集』（文化9・秋刊）

a、「むかし万載集に入りたる人〻も、今はのこりすくなくやなりたまふらん。ひとり六樹園のうじのみさかりに、すくやかにおはしまして、此集をえらみたまふ事をことぶきいはひて」（収録最終の三陀羅法師歌詞書）→【天明三年】

b、「翁がわか、りし頃の友だちのうたこそをかしけれ。（中略。本書を）続万載集とやよびけんと思ひつるを、続の字などかうむらせんは、（中略）かしこき撰集の名にかよひて、はゞかるべきこゝちすなり」（塵外楼清澄跋）→【天明頃】

ケ、便々館湖鯉鮒撰『狂歌浜荻集』（文化9・秋刊）「新撰万代狂歌集　六樹園飯盛大人撰　全四冊　此集、明和安永の頃より今に至る迄、名高き狂哥の作者達は更也、和哥の家の人々の戯れによみ出されしをも、すべてもらさずこと〻くあげたるなり」（巻末の「衆星閣蔵板目録」）→【明和・安永頃】

コ、四方真顔撰『俳諧歌兄弟百首』（文化12・1序・刊）「俳諧歌十千類題　同（四方歌垣先生）輯　全十冊　天明以来の諸名歌の秀逸一万首を撰み、四季恋雑類題に分ち」（巻末の「北林堂蔵板書目」）→【天明初年】

以上を大まかにまとめるならば、個人の事情を述べたに過ぎないものも含むのであるが、①天明三年以降（ア・クa）、

②天明初年以降（イ・カ・クb・コ）、③安永三年以降（ウ・エ）、④安永初年以降（オ・キ）、⑤明和初年以降（ケ）に区分できる。①はいうまでもなく四方赤良の『万載狂歌集』と唐衣橘洲の『狂歌若葉集』の刊行年を念頭に置いたもので、②はそれを天明期と敷延したものである。③の安永三年の根拠はいささか不明で、この年ならば二月の酒上熟寝を会主とする牛込恵光寺での宝合わせ会、「はたとせばかり（あまり）」の表現からこの年前後の頃ということならば、木室卯雲の家集『今日歌集』（同5刊）のことか、それとも飯盛撰『文化新撰狂歌百人一首』（文化6・9刊）にいう「狂歌の道、未得・卜養が後は世にたえて、唱る者もなかりけるに、橘洲のぬし、安永の比和哥の会のありしに、席上の人々をそゝのかして、戯れたる題出して狂哥よませたるがはじめなり」を指すのであろうか。[注2]④は③を敷延したものと思われるが、後の資料ながら司馬の屋嘉門編『狂歌ひゝな草』（書外題、文政10序・刊、大妻女子大蔵）には、「安永頃関東狂歌中興家元系図」を付す。⑤にいう真顔の『俳諧歌十千類題』は未見であるが、後に青山堂平々山人の所蔵となった、江戸狂歌本の嚆矢『明和十五番狂歌合』（写本。明和7成、青山堂に乞われて記した文化八年閏二月十九日付の蜀山人〈四方赤良〉序がある）の存在がすでに知られていたのであろう。後で述べる菅原長根撰『新狂歌觸』初編（天保8・春序・刊）でも、自序に「大江戸の狂歌は、明和の頃より天保の今にいたりて七十年」とある。

文化期といえば、前述のように天明期の作者の大半が死没していたことに加え、真顔が「たはれ歌よむおほむね」で俳諧歌に転向しはじめ、これに対して文化六年、飯盛が「狂歌のおこり」で狂歌と俳諧歌は異なることを主張、蜀山人も飯盛撰『万代狂歌集』（文化9・秋刊）の賛で、「滑稽ニシテ以テ教ヘ、落書ニ堕ラザル者ハ、古ノ狂歌也。金玉ヲ袵（しきね）ニシテ、本歌ニ類スル者ハ、今ノ狂歌也」（原、漢文）と明言した時期でもある。つまり作者層の変化だけでなく、天明期に隆盛を迎えた江戸狂歌の歌風もまた、すでに分裂していたのが文化期であった。にもかかわらず、まだ「天明狂歌」の語が見当たらないことに留意しておきたい。

三　江戸期(2)　―文政期以降―

まず「天明狂歌」の用語が現れる直前までの、それに類する表記を次に列挙する。

A、蜀山人『奴凧』（文政4成）[注3]「天明調狂歌集の始」（目録）

B、六樹園飯盛・芍薬亭長根等撰『天明調文政調　狂歌怜野集』（文政10刊）は未見の書であるが、「宝古堂古書目録」（「日本古書通信」69の3、平成16・3）によれば、「天明調」と「文政調」に分けて編撰したものという。

C、麦雲舎波文撰『狂哥苔清水』（天保3刊）の内題「天明古調狂哥苔清水」（刊本未見。東北大学狩野文庫蔵稿本による）。

D、菅原長根撰『新狂歌觸』初編（天保8・春序・刊）「大江戸の狂歌は、明和の頃より天保の今にいたりて七十年、（中略。その）数十年の間、風調（しらべ）かはらざる事あたはず、人々好む所ひとしからず。されど凡を論（あげつら）へば、天明ぶり、文政ぶり、今様の三体（みつのすがた）なるべし」（自序）

E、桧園梅明撰『狂歌美都のしらべ』（天保14・12序・刊）

a、「狂歌の体、やう〳〵さま〴〵なるなかに、おほかたは三体とぞなりにたる。そは天明のしらべ、文政のしらべ、天保のしらべになむ。（中略）わが友桧園のあるじは（中略）こゝらの哥をつどへて、かの三つの体をわかちて、かゝるしふさちをぞつくりいでられたる」（千柳亭綾彦序）

b、本文は「天明調之部」「文政調之部」「天保調之部」から成る。

右のうち、Aの「天明調狂歌集」の語は、目録にあって本文中には出てこない。蜀山人自身がこの時期にこの語を使用したとは考えにくく、目録そのものはもっと後年になって別人が作成添付したのではあるまいか。とはいえ文政期に入っ

て天明復古の気運が生まれたれことは確かなようで、文政元年には蜀山人生前最後の狂歌集刊本『蜀山百首』が出版され、平秩東作編『狂歌百鬼夜狂』（天明5刊、蔦屋重三郎板）の補刻板が文政三年五月に刊行されてもいる。同補刻本に新たに付された二代目耕書堂主人の跋文によれば、「此百鬼夜狂はいにし天明五ツの歳、梓にえりて世にひろくせしを、はるかにはたとせあまりをへて、文化みつのとしのやよひ、すくゆうしのわざはひにかゝりて、えりたる板のながらをうしなひぬ。さるをせちにもとむる人のさかんなるにより、こたび其たらざるをおぎなひ」出版したという。

こうした気運の中、文政も後半それも末期近くになってようやく、新興の「文政調」に対する用語として「天明調」なる語が現れたとみなすことができよう。これが天保期に入り、さらに新興の「天保調」とも相俟って「天明古調」、「天明ぶり」、「天明のしらべ」などとも呼ばれるようになったことになる。

次に「天明狂歌」の語の出現以降について例示する。

F、塵外老人昇月堂桂三千丈撰『天明古調狂歌かつらの花』（嘉永1・4刊、大妻女子大蔵）

a、「天明の頃は殊更すぐれ人余多いできて、一際耳を驚かす。（中略）さらば一ばん、世の中へ天明風を大名題に引おこさんと」（弘化4・6自序）

b、「弘化三とせといへる午の夏の頃より、昇月堂老人にちなみ催主と成侍りて、天明風狂歌再興をおもひ立しに」（扉歌十首の詞書）

c、「天明風狂歌再興月次聚会之図」（口絵）

d、「（昇月堂なる）わが師は、三寸の朱金を取て、五十年の狂歌をおこす。（中略）蛍雪の功積りて、終に天明狂歌再興の大将分とは成給ひぬ」（弘化4・6、月下園桂影住跋）

G、昇月堂老人評『天明風狂哥月次』（嘉永2～4刊、この間の17会分所見。大妻女子大浜田文庫蔵）原外題の一部は「天明古調狂歌桂月次」「天明風月次狂歌」とも。

H、江境庵北雄撰『むつきのあそび』（内題「連名披露狂歌合」。嘉永4・3開巻・刊。会主・江の字連）「天明のふり〳〵、毬打世の流行におくれぬとて、（中略）手まり唄に算ふる一ツの綴文となし」（何の舎あるしうら枝序）。なおこの会には昇月堂の他、後出の多久山人と天明老人も参加している。

I、多久山人撰『古調狂歌合』（書外題。嘉永期以降刊。東北大狩野文庫蔵）内題は「古調狂歌合」「天明古調狂歌合」。

J、長者園撰『天明ぶり狂歌月並』（嘉永期以降刊、和合連。大妻女子大蔵）

K、天明老人尽語楼内匠撰『狂歌百物語』初編（竜斎画、嘉永6・冬跋・刊）「（お化を）天明風と文政風俗、何でもかでもよみ取見取」（「槌」印序）

L、天明老人尽語楼撰『狂歌四季人物』（広重画、安政2・春序・刊）「（本書は）はくや町なる天明調の棟梁尽語楼大人のすみかねにてなれるものなり」（六朶園序）

M、尽語楼天明入道内匠撰『狂歌文茂智登理』[注4]（広重画、安政4・春序・刊）「尽語楼大人は（中略）今亦復古の志しを励まし、とかくむかしを思ひ出に、つぶりの光る箔屋町天明狂哥の看板に、偽のなき長寿の老人」（六朶園序）

N、長者園萩雄稿本『狂文紫鹿のこ』（安政5成、大妻女子大蔵）

a、「こたび天明調の口ひらきなし社中つどひて、月ごとに開巻をせめて」（安政4・6「狂歌萩のまがき序」）

b、「いまや天明のひなぶり哥さかりに行はれて、ひなびたるすき人ばかりにもあらず、いや高き大宮人も雪月花てふにはめでさせ」（安政5・5「酔泥坊寝たる手鑑序」）

O、千代春枝稿本『天明風狂歌出方題集』（安政5成、ソウル大学校蔵）

a、「天明風狂哥、春枝再発起して不老園（紀若丸）、池月堂（昇月堂の前号）此三たりにて、時折会合して狂れし事をたのしみけるに、類をもつて集るにて、此道を好める人十余人程も、時〴〵の題を出しければ、是をよみて不老園楽評せし程に、おしきかな不老園、此頃古人となりけり。しかれども思ひたちし風流のつと此なりに捨る

事おしくおもひ、是より、池月堂は本歌も学びし人なれば、池月堂楽評にして、追〳〵此道を好む友出きたり、たのしむ事いとおもしろし」

b、「此頃より昇月堂楽評にて追〳〵に連中集り、七人の催主にて初て天明風狂哥ちらしを催ふしける、左之通り」として、チラシを貼付する。そのチラシに「天明狂歌　月次兼題　昇月堂老人楽評　（中略）　玉詠取集所浅草金竜山二十軒茶亭つたや　絵（桂連の宝船の絵で、帆に七福神ならぬ七人の催主名を記す）」とある。

c、「桂連中七人の催主にて、狂哥月並うた数二百も集りける時、催主の内二人斗り、無拠世わ致し兼不参のもの有しを、楽評昇月堂力をおとして」、春枝に「未さつき」（弘化四年五月）付で手紙を送る。

d、「其後追〳〵に狂哥連集り、至極繁昌となりけるにつけて、天明風狂哥弘メを心願して、狂哥桂の花ひらきと名づけ、ちらしを春枝ニ而出来（下略）」として、チラシを添付する。そのチラシに「狂哥桂の花　製本ひらき　兼題　新樹　昇月堂老人席評」とある。

e、「桂の花ひらきの席にて」と題する別の箇所に、「嘉永元年申きさらぎ八日」との注記がある。

f、「桂花ひらきの後、天明風狂哥流行となり、あちこちの好める人、催しあり。其ちらしに、天明今様　双調狂哥月並角力　安閑亭喜楽撰（下略）」

P、不朽山人撰『冨士山百景狂哥集』（万延1・4序・刊）「近来、和哥は本居狂哥は真顔といへり。去ながら真顔の狂哥はまじめにして、今時俳諧哥といふ是なり。正真の狂哥は蜀山人はじめて読出して、諸人の耳を驚せり。是を天明風といふ。爰に麹町山王辺に大寝坊不朽山人といふものあり。よく天明風の寝言をいへり」（真入亭冨士江自序）

Q、葎窓貞雅撰『御蔵前八幡境内弁財天奉額』（元治1・仲夏刊）本文は「狂歌　天明文政調」「発句」「都々一」からなる。

R、喜田川守貞『近世風俗志』（慶応3・5序）「天明ぶりの狂歌、四方赤良等の狂歌を云ふ。世人皆知る所なり」（巻18「雑服付雑事」）

狂歌書刊本に「天明狂歌」の語が見える最初は、管見ではＦｄの『天明古調狂歌かつらの花』の弘化四年六月付跋文である。本書は半紙本一冊、見返しに「昇月堂老人撰／緑斎重麻呂画」「天明古調狂歌桂の花　全」「東都書林　学古堂寿梓」、刊記は「嘉永元戊申年初夏吉辰／本所中之郷竹町　昇月堂蔵板／製本発行書林　江戸浅草並木町　雁金屋治兵衛」とある。奥付に本書の二編と昇月堂の『狂哥袋初編』『如意授録初集』を近刻と予告するが、いずれも未刊であろう。Ｆｂによれば、弘化三年夏頃から昇月堂が催主となってこの復興が企てられたことになっており、続いて同様の企画Ｇも刊行に至っているが、そのあたりの事情については、Ｏの千代春枝稿本『天明風狂歌出方題集』が参考になる。

Ｏａの春枝、不老園、池月堂の三名で始めたというくだりは、右の弘化三年夏頃の実態と思われ、中でも中心的だったのは池月堂よりも、むしろ春枝だったことを窺わせる。Ｏｄの「狂哥桂の花　製本ひらき」チラシ作成からもそう思われる。また注目すべきは、「桂の花ひらき」が開巻披講されたＯｅの嘉永元年二月八日の後（実際にはＦが刊行された同年四月以後であろうが）、これが契機となってＯｆにいう天明風狂歌流行の気運が生まれたことである。この流行に乗り遅れまいとするＨの記述もこれを裏付ける。したがって刊行年次不明のＩとＪもまた、当然それ以後の出版とみてよかろう。なお、右の池月堂こと昇月堂と千代春枝についてはともに伝未詳であるが、稿本Ｏによれば、池月堂は初め池月堂直雄といい、嘉永四年頃の九月十三日に七十余歳没、春枝は初め松翁、後に松翁軒春枝とも号し、安政元年五十二歳だった。

ついでに他の編撰狂歌作者についてもふれておく。Ｈの江境庵北雄は通称を君塚藤兵衛、弥生庵三世の雛群のことで、東都大坂町で茶亭を営み、慶応三年二月八日五十五歳没（『狂歌人名辞書』）。Ｉの多久山人は別に稲穂庵とも号した沢山人沢山と同一人物で、蜀山人の手跡を学び、慶応三年十月十六日六十七歳没（同辞書）。Ｉの本文中には「多久山人別号良温居士」ともあり、稿本Ｏによれば押上に住している。ＪとＮの長者園萩雄は通称を石川李之丞、越後水原の代官だった幕臣で、明治六年九月二十日九十歳没（同辞書）。蜀山人の門人だった。(注5) ＫＬＭの天明老人については後述するとして、Ｐの不朽山人とＱの葎窓貞雅は未詳である。

さて、桂連が天明復古提唱とともに使用した「天明狂歌」の語は、残念ながら定着することがなかったようで、管見では他に天明老人のM一例が確認できたのみである。これに類する用語としては、弘化期になって新たに「天明風」（もっとも「風」はブリと読ませたかもしれない）の呼称が生まれ、Iによれば「天明古調」は単に「古調」と略称されていたことも確認できる。おしなべていえば、弘化期以降は天明風の呼称が主流だったといえるだろう。

幕末における天明復古といえば、早くから天明老人こと尽語楼内匠が知られていた。[注6] 前号を下手内匠、別号を飛騨山人ともいい、通称を本田甚五郎という大工の棟梁だった。小槌側判者として江戸日本橋箔屋町に住み、「狂歌指南所」の看板を掲げて活業としたという。文化期から六樹園飯盛の五側系作者として活動歴があり、[注7]『文化新撰狂歌百人一首』（文化6・9刊。前出）や『狂歌画像作者部類』（同8・9刊）、『狂歌新撰花鳥風月』（文政7・9刊）といった飯盛撰著にその肖像が見え、Mには法体姿の像が載る他、編撰狂歌集に『江都花日千両』（日本橋之部・廓中之部・劇場之部の三編三冊、広重等画、安政1刊）、『狂歌江都名所図会』（十六編十四冊、広重等画、安政3・5序・刊）、『狂歌四季遊』初篇春之部（広重画、安政5・3序・刊）などがある。彼はまた匠亭三七とも号し、式亭三馬の古い門人であったことも指摘されている。[注8] 彼が天明復古で著名なのは右の事情に加え、彼の狂歌本の挿絵を多くを手掛けた有名な初代一立斎広重がその門人だったことも一因であろう。[注9] 天明元年生まれだったことを利用したと思われるその天明老人の号を含め、とかく目立ったからであろうが、すでに述べたように彼は桂連が巻き起こした天明復古のブームに巧みに乗ったまでで、桂連同様に復古を大成することなく文久元年五月十四日に八十一歳で没した。

江戸期の最後として、文政期以降の人々が天明期の狂歌の範囲をどうとらえていたかを見ておこう。

サ、喜多村筠庭『嬉遊笑覧』（文政13・10序・成）「安永・天明の頃に至りて、江戸に狂歌はやり出。その初め、橘洲などにや。次で漢江・赤良、ならび興る」（巻3「詩歌」）→【安永・天明期】

シ、山田桂翁『宝暦現来集』（天保2・成）「狂歌は、安永年中より専ら流行となる」（巻2）→【安永初年】

ス（前出D）、菅原長根撰『新狂歌鵺』初編（天保8・春序・刊）「大江戸の狂歌は、明和の頃より天保の今にいたりて七十年」（自序）→【明和期】

セ、斎藤月岑『武江年表』（嘉永2序・刊）「天明中、狂歌殊に行はれたり」（「天明年間記事」）→【天明期】

ソ、『蜀山人自筆文書』（文久3跋・成）「（貼交ぜの中に）天明・寛政・文化の年間、さかんにざれ哥読たる大人達の俗性、あるは宿所などまでしるし置たるを見れば、をのれが席上に莚をならべたる人々もあまたありて、（中略）又ざれ哥仲間に逢ひ見る事と思へば」（長者園跋）→【天明期～文化期】

おおよそ前述文化期までのそれと変わらないが、物故者との関連からかソの長者園が文久三年の時点で下限を文化期に設定していることが注目される。つまり江戸期全体をまとめれば、「天明狂歌」の時期的範囲は狭義では天明年間、広義では明和期から文化期までと理解されていたと思われる。

四　明治・大正期

以下、研究文献は主として初出ではなく単行本を中心とするが、「天明狂歌」の語を用いているのは次の四氏である。

1、武島羽衣氏「天明の狂歌」（「帝国文学」4の10、明治31・10）「（実名謙之助（ママ）なる人物）これ実に天明狂歌壇の先駆者としてかくれなき唐衣橘洲にぞありける」

2、鶴見吐香氏『蜀山人』（明治31、裳華書房刊）「（江戸狂歌の発生と展開を述べた寛政九年五月付の橘洲の一文は）所謂天明狂歌の小歴史と云ふべし」（注10）

3、蟹の屋老人「最古の天明狂歌集」（狂歌雑誌「みなおもしろ」2の7、大正6・10）「『初笑不琢玉』と題する狂歌集を見るに（中略。これが）天明調狂歌集最初の出版物となすを得べし」

4、永井荷風氏「狂歌を論ず」（『江戸芸術論』。大正9、春陽堂刊）「天明六年北尾政演が描ける狂歌五十人一首は天明狂歌の粋を抜きたるもの其の板画と相俟って狂歌絵本中の冠たるものなり」

近代では明治三十年代になって天明狂歌の語が使用され始めたことになるが、著名な3の蟹の屋こと野崎左文ですらまだ天明調、狂歌集とも記している。この時期で最も多用されているのはこの天明調の語である。

・鶯亭金升『狂歌の栞』（『風雅文庫』3。明治35、博文館刊。宝山人詠「てめい調狂歌集」を収む）「金升の居る数寄屋河岸は四方真顔銭屋金埒なんど、云ふ判者が居た所で、（中略）其処へ宿を定めてから数寄屋雅史など、名乗るに付ては、天明調の名歌の一首位は詠ねばならぬ次第であるが」

・菅髑髏氏『文芸叢書狂歌梗概』（明治35、金港堂刊）「其の主権の江戸に移ると同時に、狂歌は従来の風体を一変して、所謂「天明調」なるものを創成し、以て貞柳一派によりて馴致せられたる、「浪花風」を圧倒」

・藤岡作太郎氏『国文学史講話』（明治41、開成館刊）「歓楽場裡の消息はさながら青本に現はれ、洒落本に写されしが、ほかにまた適切にこれを髣髴したりしは、天明調の狂歌なり」

・幸田露伴氏『狂歌』（『新群書類従』10。明治41、国書刊行会刊）「此等皆京阪の狂歌と系統を異にせる江戸狂歌の高潮たる所謂天明調の代表たるべきものなり」（「例言」）

・野崎左文氏『狂歌一夕話』（大正4、非売品）「天明年間には捲土重来の勢ひを以て文芸界に雄飛し終に天明調狂歌の名を擅ま、するに至った」

・塚本哲三氏『古今夷曲集・万載狂歌集・徳和歌後万載集』（『有朋堂文庫』。大正4、有朋堂書店刊）「万載狂歌集と徳和歌後万載集とは何れも四方赤良即ち蜀山人の撰する所にして、（中略）共に所謂天明調の代表的詠作を萃めたるもの、江戸狂歌の粋は挙げてこの内にあり」（「緒言」）

・野崎左文氏「狂歌書類解題（七）」（狂歌雑誌「可良毛裳」14、大正8・9）「（『狂歌若葉集』所載の内山椿軒の狂歌）

五十六首中天明調の手本ともすべきよろしき歌多し」

・樋口二葉氏『手拭合』解説（「稀書解説」第二編、大正11、稀書複製会刊）「安永の頃よりは内山椿軒門下の太田南畝（ママ）（四方赤良）、唐衣橘洲、朱楽菅江らの才人輩出し、所謂天明調を映じ出し、狂歌の風格こゝに一変せり」

などの例が確認できる。次いで散見される天明風は「風」の読みの問題もあるので天明ぶりと一緒にして例示すると、

・関根正直氏『小説史稿』（明治23、金港堂刊）「天明風の狂歌を唱へて、海内を風靡し、四方赤良と狂名せり」（「四方山人」）

・四世絵馬屋額輔氏『狂歌奥都城図志』（明治24・8序、稿本）「橘洲、菅江と共に天明風の狂歌を唱へて」（「蜀山翁墓」）

・中学社編『狂歌博士』（明治39、博報堂書店刊）「内匠は頻に天明風（ルビ「てんめいぶり」）狂歌の復古を唱へたれども（中略）卑俗にして高雅なるものは一もなかりき」（「下手内匠」）

・関根正直氏「狂歌志略附狂文」（国民文庫『狂歌狂文集』。大正1、同刊行会刊）「橘洲赤良の両雄（中略）東西に嘯き立ちしは、天明の頃なりけん。されば当時の詠を天明振と称して、狂歌の黄金時代とはするなり」（同氏『からすかご』〈昭和2、六合館刊〉所収「狂歌の源流と盛衰」及び同氏『史話俗談』〈大正10、誠文堂書店刊〉所収「狂歌史談」はこれと大同小異）

・三田村鳶魚氏「弥次喜多の大阪見物」（『鳶魚随筆』。大正14、春陽堂刊）「江戸では狂歌が刷新された。あの天明ぶりといわれる風体が創始されている」

などとある。天明風は用例数こそ天明調より少ないものの、時期的には天明調の語よりも早くから使用されている。江戸末期の流れを引き継いでいるのであろう。前述のように明治三十年代からは天明調の語が主流となるが、ともかくも明治・大正期は全体として、江戸期の延長にすぎないといってよいであろう。

五　昭和前期　―同二十年の戦中期まで―

昭和に入ると、大正期までとは重複しない新たな七氏が「天明狂歌」の語を使用し始める。

5、藤井乙男氏編『蜀山家集』（『歌謡俳書選集』10。昭和2、文献書院刊）

a、「（寛政九年五月付の橘洲の一文は）宝暦明和頃の江戸狂歌の濫觴から筆を起して、天明寛政の黄金時代に説き及ぼした小天明狂歌史とも言ふべきもの」（「狂歌小史」）

b、「（椿軒こと）賀邸門は実に天明狂歌の揺籃とも言ふべく、幾多の駿足を輩出」（「蜀山人評伝」）

6、三村竹清氏「天明狂歌の発端」（「日本及日本人」167、昭和4・1）「万葉の戯歌が天明狂歌の祖なるが如く、後の狂歌師共は言ってゐるが、（中略。ここまでの）記事は天明狂歌の発端で、書くべき事はこれからである」

7、林若樹氏校訂『狂文狂歌集』（『日本名著全集』19。昭和4、同刊行会刊）「解題」

a、「明和安永より天明に至って（中略。狂歌も）所謂天明調の盛況を呈するに至った」

b、「実に天明狂歌の源は赤良、橘洲、菅江等の師たる内山椿軒先生に迄遡らねばならぬ」

c、「天明調狂歌の心髄を知らんとせば若葉、万載、後万載、才蔵の四集を読めば足りる」

8、木村仙秀氏「吾妻曲狂歌文庫」（「浮世絵芸術」4の1、昭和10・1）「天明狂歌壇の盛時を語るものは、刊書だけでも仲々に数多い」

9、菅竹浦氏『近世狂歌史』（昭和11、中西書房刊）

a、「（大奈権厚紀こと大屋裏住）は天明狂歌壇の先駆者には相違なきも、橘洲や赤良や東作などの徒と同格には見られない、謂ゆる惑星的人物であった」（第三篇第二章）

b、「天明狂歌の発祥」（同篇第四章）

c、「赤良、橘洲、菅江らによって一時代を画した狂歌は、世に之れを天明調といひ、（中略）後年、狂歌を論ずる者は是等の人々によりて造られたる天明前後の歌風を以て、天明調と称し、狂歌の粋としてゐる」（同篇第七章）

d、「（鳴滝音人は）天明狂歌界古参者の一人」（同）

e、「天明調の全盛期は実に天明元年から寛政享和を経て、文政の首め頃まで凡そ四十年間である」（同篇第十章）

10、浜田義一郎氏『蜀山人』（昭和17、青梧堂刊）

a、「（南畝が）文壇人として活動したのは四方赤良時代の僅々十五年に過ぎず、この間に狂歌の中心的存在として天明狂歌の盛行時代を樹立」（「前書き」）

b、「天明狂歌の発生」（「三　四方赤良時代（上）」）

11、玉林晴朗氏『蜀山人の研究』（昭和19、畝傍書房刊）

a、「天明調狂歌と四方赤良」（第十一章）

b、「南畝は天明狂歌の統領として、直接其の隆盛を促進させた代表者となった」（同）

さすがに昭和になると、筆者などには右各諸氏の芳名は馴染み深い。特に7911は天明調の語をも併用してはいるものの、7は今もって名解題といってよく、通史研究書の9は現在も最高水準を保っていてこれを越える書がなく、蜀山人研究としての11も不動の意義がある。しかしそうはいっても用語上は大正期を脱却したわけではなく、この期もまだ次のように天明調の語が主流を占めていた（便宜上、天明ぶりの語も含めて列挙する）。

・狩野快庵氏『狂歌人名辞書』（昭和3、文行堂・広田書店刊）「安永年間橘洲、菅江と共に天明調狂歌を主唱し、其名大に著はる」（「赤良」）

・野崎左文氏校訂『万載狂歌集』（昭和5、岩波文庫）「是れが即ち天明調の狂歌の起りで、（中略）天明調の代表的撰

集といへば先づ赤良の撰んだ『万載集』」（「例言」）

・野崎左文氏『狂歌の研究』（『岩波講座　日本文学』。昭和6）

a、「後に謂ふ天明ぶりの狂歌は椿軒を生みの親として、早くも明和六七年に呱々の声を揚げたものとすべきである」

b、「此天明調狂歌の全盛期は、実に天明元年から寛政、享和を経て文化の初めまでの二十四五年間」

・野崎左文氏「狂歌狂文研究」（『日本文学講座』9。昭和6、新潮社刊）「（寛政年間に至るまでの）此の狂歌を世人は天明調と称へて貞柳一派の浪花ぶり狂歌と区別する事となった」

・木村仙秀氏『江戸二色』解説（「稀書解説」第七編上、昭和7、稀書複製会刊）「（卯雲家集『今日歌集』の出版は）本書の刊行より四年後の安永四年（ママ）なれど、天明調の狂歌書としては初期に属するものなり。（中略）所謂天明振りの気風に乏しと雖も、間々時事の諷刺をも含み」

・森銑三氏「大田南畝とその洒落本」（「国語と国文学」10の1、昭和8・1）「（安永9年刊の）『粋町甲閨』の成った頃には、いはゆる天明調の狂歌が将に大いに興隆しようとしてゐた」

・木村仙秀氏『絵本見立仮譬尽』解説（「稀書解説」第八編、昭和9、稀書複製会刊）「天明調狂歌の萌芽は、すでに宝暦の中頃より起こり（中略。本書の狂詠は）天明振りの真骨頂を見る能はずと雖も（中略）流石に隆盛期の作品として愛賞すべき」

・野崎左文氏「狂歌史」（『日本文学講座』6。昭和9、改造社刊）

a、「（天明期に連なる江戸狂歌は）浪花ぶりの狂歌が有りの儘東漸したのではなく、全く関東に於て創始された一種の姿で、後世之を天明調と名づくるに至った」

b、「天明調の全盛を極めたのは僅に三十余年間で、文化の始めには橘洲を始めとして多くの大家は既に物故し、赤良の蜀山人のみ存命であった」

・菅竹浦氏『狂哥書目集成』（昭和11、星野書店刊）「天明調狂歌の発祥を成せる江戸最初の会合に由て作られた貴重な資料である」（『明和十五番狂歌合』注記）

・藤村作氏編『日本文学大辞典』2（昭和11、新潮社刊）「（江戸狂歌は）天明・寛政年間には流行の頂点に達し、世人は天明調狂歌と名づけてこれを称揚した」（野崎左文氏執筆「狂歌」）

・三田村鳶魚氏「滑稽本概説」（評釈江戸文学叢書『滑稽本名作集』。昭和11、大日本雄弁会講談社刊）「（上方ふう）を一転したのが天明ぶりであります」

・高野辰之氏『江戸文学史』下（『日本文学全史』9。昭和13、東京堂刊）「（天明期の）狂歌は江戸に於て沖天の勢を呈した。（中略）これが所謂天明調で、大田蜀山人以下教養のあるものが詠出（中略）、天明寛政は実に狂歌の最盛期であった」

以上のように見てくると、明治以降戦中までは、「天明狂歌」使用者は少数ながら常にいて微増してはいるが、この語が市民権を得たとはとても言い難い状態であったことがわかる。筆者が当初憶測した野崎左文氏などは、確かにこの語の使用者の一人（前引3）ではあるものの、さしずめ「天明調」愛用者の最たる研究者だったことになる。

六　昭和後期　―戦後の同二十一年以降三十年代半ばまで―

昭和後期については紙数の都合もあるので、ひとまず同三十年代半ばあたりで区切ることとする。戦後のこの期になってようやく「天明狂歌」の語の定着を見る。主だった研究書等におけるその用例は次の通りであるが、一変してもはやこの語のオンパレードといってよく、戦中までの基調用語だった天明調はすっかり影を潜める。

12、小池藤五郎氏「川柳・狂歌」（『日本文学講座』4。昭和26、河出書房刊）

a、「風来山人（平賀源内）、木室卯雲、大奈権厚紀（大屋裏住）等を過渡期の作者として、天明狂歌の世界は開けて行った」

b、「天明調の狂歌の花は、絢爛、前後に比較する物が無いほどに咲き出たのである」

13、石川淳氏『夷斎清言』（昭和29、新潮社刊）

a、「宿屋飯盛は四方赤良系の狂歌師として天明狂歌の運動に一役買ってゐる」（「遊民」）

b、「（四民区別のない狂名世界が培ったものは）文学の毒である。天明狂歌の精神上の効果はここにあった。やがて（中略）狂名は意味をうしなひ、毒またおとろへて、天明狂歌の精神はほろびてゐる」（同）

c、「天明狂歌師中の最年長である大屋裏住」（「狂歌百鬼夜狂」）

d、「天明狂歌はその発祥に於て青春の運動であり、老朽の徒はかへってこれに参加しないといふ事情があった」（同）

e、「天明狂歌は後世の大学校の文学講座から締め出されたやうには、当時の公衆から孤立してはゐなかった」（同）

14、浜田義一郎氏「川柳・狂歌」（麻生磯次氏守随憲治氏編『日本文学研究入門』。昭和31、東京大学出版会刊）「（野崎左文には）「狂歌一夕話」（中略）その他があり、天明狂歌の鑑賞で教えられるところが多い」

15、浜田義一郎氏「川柳と狂歌」（久松潜一氏編『日本文学史』近世。昭和31、至文堂刊）

a、「（内山賀邸の）門人に後年の唐衣橘、四方赤良、朱楽菅江、平秩東作等がゐて、天明狂歌の巨頭は皆この門に集ってゐたのである」

b、「天明狂歌はその時代の最も新しいジェネレーションを代表してゐた」

c、「天明狂歌も一度び大衆の手に移るや、忽ち低落する」

d、「（宿屋飯盛の）歌風は典型的な天明調といってよい」

16、浜田義一郎氏「江戸狂歌」（麻生磯次氏・小池藤五郎氏編『日本古典鑑賞講座』23。昭和33、角川書店刊）「（大衆参加は無軌道な氾濫を招くが）天明狂歌はその点に自由であっただけに、無統制に陥る危険が大きく」（「いわゆる天明ぶり」）

17、杉本長重氏・浜田義一郎氏『川柳狂歌集』（『日本古典文学大系』57。昭和33、岩波書店刊）

a、「橘洲ら天明狂歌を創始した人々は現に流行している浪花狂歌を否定し」（狂歌集の部の浜田氏「解説」）

b、「天明二年四月、三囲稲荷団扇会に名を連ねる（人々が）天明江戸狂歌の重要メンバーである」（同）

c、「寛政に入ると天明狂歌に対する反省が起り、古典和歌へ歩み寄る気運となったので」（同）

d、「天明狂歌の技巧」（同）

e、「狂名に工夫を凝らすことは天明狂歌の最初からの習慣で」（同）

18、石川淳氏「蜀山雑記」（右の『日本古典文学大系』57「月報」。昭和33・12）

a、「（『蜀山百首』では）此一帖吾家狂歌髄脳とうたって、かういふ本があらはれたのを見ると、天明狂歌の運動つひに終焉といふ感がふかい」

b、「天明狂歌の性質から見て、そのながれに個人の家集が出るやうになっては、運動全体の脈があがった」

19、浜田義一郎氏『川柳・狂歌』（『岩波講座日本文学史』9。昭和34）

a、「しかし寛政に入るとにわかに天明狂歌に対する批判と反省が起こり」（「六　天明狂歌の性格」）

b、「（寛政改革を経て）歌風もまた著しく変化し、天明狂歌江戸狂歌と新風を誇っていたが、転じて昔ながらの俳諧歌に近づこうとし」（「七　寛政改革と狂歌」）

c、「天明狂歌の意義は従来の狂歌を離れ、新しい文芸美を創造した点にあった」（同）

20、吉田精一氏・浜田義一郎氏『川柳集　狂歌集』（『古典日本文学全集』33。昭和36、筑摩書房刊）

a、「江戸狂歌（天明狂歌とも呼ぶ）の震源地は言って見れば唐衣橘洲の四谷の家である」（狂歌集の部の浜田氏「解説」）

b、「武士も町人も無差別に入りまじったところに、庶民的だがどこかコツンとしたところのある天明狂歌の特色が生まれたのである」（同）

c、「真顔は（中略）堂上和歌に接近して俳諧歌を主張するためには、天明狂歌の歯切れのよさを落首風だと非難（中略）いっぽう宿屋飯盛は（中略）真顔に挑戦して天明狂歌復興を唱えた。（中略）それとても天明狂歌の反復以外の何ものでもなく、狂歌はとうに発生時の存在意義を失っていたのである」（同）

「天明狂歌」の語に市民権が与えられるに至った最大の功労者は、作家では石川淳氏、研究者では浜田義一郎氏であることは右によって明白である。戦後の江戸狂歌研究に関しては、石川氏が永井荷風氏の跡を継ぎ、浜田氏が野崎左文氏と菅竹浦氏を継承した形となり、この二人が戦後におけるこの分野の中心的存在だったことが大きな要因といってよい。

それにしても、特に浜田氏の天明時代に対する傾倒には並々ならぬものがある。戦後すぐに天明社なる出版社を興し、その名も『天明叢書』の第一冊目として出版したのが、義弟に当たる吉田精一氏の『日本近代詩鑑賞　明治篇』（昭和21刊）であった。[注11] また『天明文学―資料と研究』（昭和54、東京堂出版刊）は氏の古稀記念編著であり、その自序に「天明文学というのは稍々耳なれない感もあるが、江戸中期におこった江戸市民の文学が一応の頂点に達したのが天明年中であり、またすでに天明調・天明ぶり等の成語もあることだから、謂れなき呼称ではない」とあるが、この「天明文学」の語も実はこれが初出ではなく、二十年以上も前の前引15に、「（四方赤良は）狂歌・洒落本・黄表紙等各方面に活躍し、天明文学の盟主の観があった」と見えている。

七　「天明狂歌」の時期的範囲　―まとめにかえて―

「天明狂歌」と呼ぶその時期的範囲について、最盛期の天明年間を以て狭義とすることに現在も異議はなかろう。広義では少なくとも江戸人は、最大で明和期から文化期と考えていたことを前述した。では近代以降の研究者たちはどうであろうか。

まず上限であるが、藤井乙男氏は前引5において、江戸狂歌の発生と展開を述べた唐衣橘洲の寛政九年五月付の一文を元に、その濫觴を宝暦明和頃とみなされ、木村仙秀氏も『絵本見立仮譬尽』解説（前掲「昭和前期」の天明調用例参照）で、「天明調狂歌の萌芽は、すでに宝暦の中頃より起こり」とされる。確かに風来山人こと平賀源内やその友人だった木室卯雲などが宝暦期に江戸狂歌を詠んでいる。しかしそれは個人的な営為であって、この期には後の天明狂歌に連なる江戸狂歌の集はない。宝暦期はやはり過渡期と認定すべきで、天明狂歌の広義の上限は、江戸狂歌の嚆矢『明和十五番狂歌合』の成立を敷延した明和期からとするのが妥当であろう。

残る下限の問題について、近代以降の主な諸説を次に列挙してみる。

Ⅰ、発生を明和期と認定するものの、下限は天明期まで（浜田義一郎氏『川柳狂歌集』〈日本古典文学大系〉57、昭和33）

Ⅱ、寛政年間まで（野崎左文氏「狂歌狂文研究」昭和6、『日本文学大辞典』昭和11）

Ⅲ、文化の初めまで（同氏の『狂歌の研究』昭和6と「狂歌史」昭和9）

Ⅳ、文政の初め頃まで（同氏『狂歌一夕話』大正4、菅竹浦氏『近世狂歌史』昭和11）

Ⅴ、『蜀山百首』が文政元年正月に刊行される前（石川淳氏「蜀山雑記」昭和33・12）

浜田説のⅠは、後に「天明狂歌は、文字どおり天明末年をもって終ったと言ってよい」（「狂歌」〈全国大学国語国文学会『講座日本文学』8、昭和44、三省堂刊〉）と明言されているように、その発生期は認定されても、そもそもの狭義と広義を区別されることがなく、その根拠も前引の17ｃや19ｂに明白である。Ⅱは隆盛期を天明期のみならず寛政期にまで拡大する解釈に基づく。Ⅲは歌風に関して真顔と雅望の間に見解の相違が現れる直前あたりを基準にしているようで、寛政と文化に挟まる享和期に、江戸で初めて狂歌の会を開いた橘洲が没していることも踏まえていよう。文化期までには大半の天明作者が没していること前述したが、その末期あたりを意識しつつ、蜀山人の生前最後の狂歌集刊本が文政元年の『蜀山百首』であることに基づいたのがⅣである。Ⅴはやや漠然とした感があるが、この『蜀山百首』をキーワードとする前引18ａｂの解釈による。結論的にはⅣとほぼ同じであろう。

寛政期における江戸狂歌の解釈については現在、天明期とはすでに質を異にするとの浜田氏の主張が首肯されていると思われるが、その浜田説のⅠは天明狂歌の発生期として明和まで遡っているのであるから、あえて狭義とは異なる下限をも設定するとすれば、一体どこまで下ればよいのだろうか。当の江戸人たちの発言をも含めて留意点を列挙すれば、

①文化期にはすでに歌風が変質しているにもかかわらず、この期までは天明調、天明風といった表現が見当たらない。（前述）

②文政期も後半それも末期近くになってようやく、天明調に対する新興の歌風を指す文政調の語が現れる。（前述）

③主な天明狂歌作者の物故をも意識してか、蜀山人門人の長者園萩雄は下限を文化期とする（前引ソ）。

④四方赤良こと蜀山人とその編著『万載狂歌集』を、天明期の代表的作者および編著とする（前引オ・クａ・Ｐ・Ｒの他、枚挙に暇がない）。

⑤文政元年刊の蜀山人生前最後の狂歌集『蜀山百首』は、その自筆版下の筆跡に重点を置いて出版された側面を持ってはいるものの、収まる狂歌は概して晩年の詠が多い（前引17）。

ということになろう。特に④を踏まえて⑤の内容を考える時、Ⅱ説とⅢ説は妥当性を欠くと言わざるを得ない。ではⅣ説が妥当かといえば、これは②を包含していない。結論として筆者は、蜀山人が文政六年四月六日に七十五歳で没する、その年を下限としたい。この年ならば②の直前に相当し、①から⑤のいずれとも矛盾せずにすべてを包含するからである。文政六年という結論のみにこだわればあまりに安直な感がしないでもないが、筆者は短絡的に蜀山人の没年に結びつけているのではなく、江戸人の認識をも踏まえて総合的合理的に考えた、その結果であることを強調しておきたい。天明狂歌の時期的広義は、明和期から文政六年までとすべきであろう。

以上が江戸期約百年と明治以降約百年の計二百年にわたる雑駁な調査報告であるが、これを以て中野三敏氏から与えられた宿題のレポートとしたい。

注1　菅竹甫氏『近世狂歌史』（昭和11、中西書房）第三篇第十章「名ある作家の物故表」参照。

注2　野崎左文氏「狂歌狂文研究」（新潮社『日本文学講座』9、昭和6）などが引用する蜀山人の随筆『奴凧』には、「江戸にて狂歌の会を始めてせしは安永四年二月二十三日、四谷忍原横丁に住める小島橘洲なり」とある（『大田南畝全集』10〈昭和61、岩波書店〉所収本などには傍点部がない）。

注3　『大田南畝全集』10と『新日本古典文学大系』84（平成5、岩波書店）の中野三敏氏解説による。

注4　本書の序文を省いた刊年不明改題本に『狂歌百人一首』（大妻女子大蔵）がある。

注5　筆者が貼交ぜ巻子本『蜀山人自筆文書』を「大妻女子大学文学部紀要」21号（平成1・3）に翻刻紹介した折、跋文執筆者の自署が癖字で判読できず、「八十翁　□□園」と空欄にしたが、稿本Nを見るに及んで長者園と判読できた。同跋文中に「をのれが師なる杏花園大田蜀山翁」とある。なお長者園の八十歳は文久三年であるので、この場を借りて、同巻子本の成立を嘉永・安政の交から文久三年と訂正しておきたい。

注6　注1の書第三篇第十章「天明調狂歌の復活を謀りし人」参照。

注7　赤良の『万載狂歌集』（天明3刊）や『狂文狂歌老莱子』（同4刊）に見える内匠半四良（はしら）、また飯盛の『絵本天の川』（寛政2刊）に出

る尽語軒は、本文後述の生年からして別人であろう。

注8　棚橋正博氏『式亭三馬』（平成6、ぺりかん社）参照。

注9　四世絵馬屋額輔氏『狂歌人物誌』（『江戸文学類従』所収）。

注10　蜀山人没後に『奴凧』広本系にも取り込まれて著名になったこの一文については、拙稿「狂歌の流行」（講座日本の伝承文学2『韻文文学〈歌〉の世界』平成7、三弥井書店刊）および「『繍像百人狂詞百人一首』の成立とその意義」（「芸能文化史」14、同8・12）参照。

注11　石川了・江本裕編「濱田義一郎先生年譜」（「大妻国文」18、昭和62・3）。